



# こんぴらさん障壁画の謎

—若冲・岸岱をめぐって—

## 【第4章】

# 応挙、若冲以前

奥書院が建築され、若冲が描くまでのおよそ100年間、障壁画はあったのだろうか。

表書院は、応挙以前に瀧之間、七賢之間、虎之間、鶴之間と呼ばれる部屋があったといわれる。狩野永納著『本朝画史』（1674）巻4の「障壁に画く図様式法」に「山水を以て殿中の上段に為す。人物を以て殿中の中段に為す。花鳥を以て殿中の下段に為す。走獸を以て庇間の中に為す。」と記してあり、虎を花鳥とみなせば表書院の画題と重なることから、狩野派画家の可能性が指摘されている<sup>1</sup>。桜の画があったという表書院「桜の間」は、青の無地紙に張り替えられ、床の間に狩野七之助による富士の掛物をしたことから「富士の間」と名称が変更された。

奥書院の若冲以前の障壁画については、画題踏襲の慣習から、上段の間西側の小襖に残された「直信」印のある《水墨山水図》が、若冲の二の間《山水図》に引き継がれた可能性も考えられるという<sup>2</sup>。

直信というと狩野松栄（1519～1592）だが、土居氏、伊藤氏共に

本作を松栄の真筆とみるのは難しいことを指摘している<sup>3</sup>。

書院建立時期は、初代高松藩主・松平頼重の斡旋で金毘羅は朱印地となり境内整備が図られた。松平頼重が慶安元年（1648）に奉納した狩野探幽・狩野尚信・狩野安信筆《三十六歌仙額》のほか、狩野探幽筆《山水図屏風》、狩野尚信が金毘羅に奉納するために描いたと思われる《出山釈迦並梅竹図》、高松藩の御用絵師・狩野常真筆《象頭山十二境図巻》、狩野安信・狩野時信筆《象頭山十二景図》など宝物として蔵される。金光院と高松藩との関係は深く、狩野派の作品が高松藩関係から伝わっていることを鑑み、あえて想像を逞しくすれば、表書院・奥書院共に狩野派もしくはその系統の画家による障壁画が存在したかもしれない。



「直信」朱文壺印



三十六歌仙額



在原業平 書・青蓮院宮尊純法親王  
画・狩野探幽



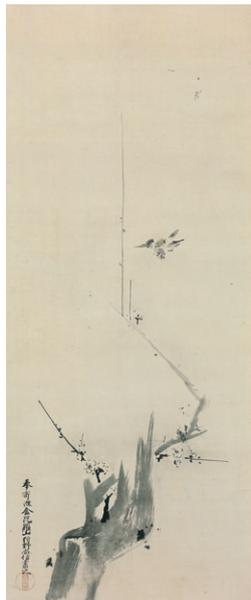
平兼盛 書・滋野井季吉  
画・狩野尚信



中務 書・坊城俊完  
画・狩野安信



狩野探幽 山水図屏風



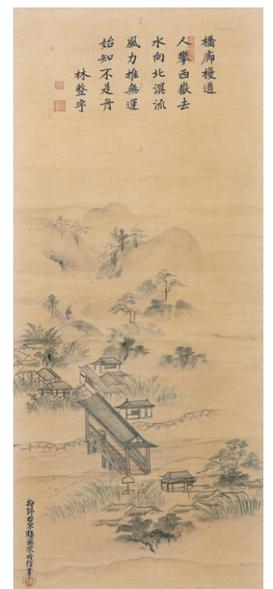
狩野尚信 出山釈迦並梅竹図



狩野常真 象頭山十二境図巻より<前池躍魚>



賛・林鷲峰 画・狩野安信  
象頭山十二景図より<前池躍魚>



賛・林鳳岡 画・狩野時信  
象頭山十二景図より<橋廊複道>

- <sup>1</sup> ①土居次義『障壁画』pp.17-18
- ⑤河野元昭論文p.21
- <sup>2</sup> ④古田亮論文p.23
- <sup>3</sup> ②土居次義『讃岐金刀比羅宮の障壁画』p.5解説
- ③『金刀比羅宮の名宝—絵画』p.391解説

参考文献

- ①土居次義『障壁画』至文堂、1966
- ②土居次義『讃岐金刀比羅宮の障壁画』マリア書房、1974
- ③『金刀比羅宮の名宝—絵画』金刀比羅宮、2004
- ④古田亮『金刀比羅宮書院障壁画の時空間』『金刀比羅宮書院の美 応挙・若冲・岸岱』東京藝術大学美術館、2007
- ⑤河野元昭『金毘羅障壁画試論』『金刀比羅宮書院の美 応挙・若冲・岸岱から田窪まで』金刀比羅宮・三重県立美術館、2007